

東詩名美久片

三  
二

花四

全九

西莊文庫

特別

~4

8179

1

9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

頁  
八  
8179  
1

三ノミヤノ草巻第一

寶永七年二月十八日

早春河

今朝もはや氷を知らず波の花もあつた白く甚乃山川

日十三日 於新玉津宮

あり色梅

地をぬき花の鏡もくもりあつた色香はうす梅の下水

通橋晩葉

夕暮もあつてさそむ行人の水端さうさうと白く花

六月十日 於運祿寺

晩夏蟬声

蝉ちりき木之れさうさうと蟬乃鳴きもあつた風は乱れ

日十八日



堂

夕月の入りに後山をくぐりて中庭中へ一寸坊をう那  
日日山

文月一程毎ても久し神祇山下は岩根の動るも世  
初秋夕

ちり免るも秋と心志を淋しきのふかき夕暮此を  
八月廿日定家公御願供

寄歌述懐

いふより一乃心乃種をりの人乃祠のまねを吟く舞  
九月廿八日於建礼寺

樵語兩

采人も志し休をむる此情ありや松乃下道  
猿泊重衣

仲をな成志を風阿まそく今夜又回し湊しよき祢を託

晴明神社法樂

著書去西

除面此情方も曲こそ去をなると人やうなるぬらに坊も  
十月十日於建礼寺

葉落月明

木の屑をり心をしみえし月もくもぬくもき庭の枯  
日廿八日

傳聞息

夏もきたらぬ面影れいふしそ人傳ちうも言ふをそん  
龍安寺此池の舟身がうそ

紅葉くれうら初波小住をのりも祢の床も端をそく  
十二月七日冠波の舎

早秋

空永八年  
之日  
早秋の暮つれに色も心とくちか初秋の暮

兼書

さしつくりしに暮も更しき程の暮乃先とす

水郷朝霞

花鳥の色もさしつくりしに暮も更しき程の暮乃先とす

柳道風

一ふらりとも吹風のさしつくりしに暮も更しき程の暮乃先とす

春風来海上

のしけり波もさしつくりしに暮も更しき程の暮乃先とす

九月二日

惟高親王此位給ひし御室の御成り

とひつり

御施りさしつくりしに暮も更しき程の暮乃先とす

日夜八瀬の山家にやとりて床に鳴き

小男床の立ちやいつこ山風の石のうらさきく明る声

十一月十八日乃覽

能安寺此の鳥をとんま

来しに草中のみ月も水鳥の友とひしと聲れさしつくりし

八月十五日

石法乃御神存成おうり

物の言も初きてそよめたる法乃神乃法存此の

鷺書

詠ともし聲をさしつくりしに暮も更しき程の暮乃先とす

寄原志

心ふしそよよはむむ小冊系れり中も世の便りに  
西の法師の位紙ひし 昔法師の回紙をよ  
ま〜して

昔法師のよ〜し人の心さく〜して志く〜えり 昔法師  
〜し 性北花び折てちら〜し

云の葉北花びら〜し 志く〜し 昔法師の在れ一枝

氏者小冊前宰お實法郷より法師返〜し

折法らも性北花びら〜し 志く〜し 昔法師の在れ  
残雪

お花ら成〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

卯月十日日

賀茂乃宗子成お〜し

昔をりちり昔をり〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

賀茂乃社成納梅願勅進

昔法師

昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

日夕夕立

昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

日 寄月志

昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

七夕

昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

昔法師

昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ 志く〜し 昔法師の在れ

柳 志

白家もたら此縁の色を知らず玉如きとむね青柳の系

八月十五日飯真堂よき尚在

三十一に秋のまれ中又今宵分は月めさやうき  
曰古八日於氏者少海家

同掛衣

少見ぬきても老の縁うそ小秋重き衣此衣うつ髪  
日 寄 縁 恋

末の巻そらと程き人片系れおそ純ゆ一人の髪りを

日 笠 松

髪是とく少とさひくふれくの枕より此朝此松風  
癸巳年九月廿六日晴明淨社法樂十首の内

松下納涼

福指くく衣子さくく夕日影隔る朝の雲此衣く風

湖上晚意

鳥の海や波るれ夕日ほのうみて衣か立ちむる辛湯の松  
氏者小海家より

待 恋

幾交うううくくくくくくくくくくくくくくくくくく

九月廿九日浪濺りりり

紅葉

木くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
氏者小海家より

寄 末 恋

己を人ほきぬく松小やより此を根さうくくくくくく  
梅月堂新宅乃會

河水久澄

絶つしねをうらむ心乃末をくちうねくちをなすかた河あり  
武者少海家よりて

河網代

かろ火の勢も乱まそちら波く河風をきき宇治北網代来  
十二月廿七日厭離菴より君北夜身集地勢  
をききしこめ

君の頼み松の風をうらむまこく尾上くまをふ集来れを  
同廿八日同下老北朝

山家雪

と承ちうらむおひひくちうらハ柿さも長也ぬる君北山里  
惜落花 五秋真を当座

吹風くちもさくちを地ちをハあくちつ見ゆ来去くまは  
武者少海家当座

竹

うきゆきを志を記抱く世の中誠志くそまくちを記は異竹  
日 悲久人志

あひもろ記は正月志也葉一秋也を記ハ人おひくち  
正徳四年正月廿六日之成丈と、浪瀬野乃  
梅花もふふゆりく

秋をて海を神ふちうらせしとくをうらやを記風の梅を香  
日廿九日武者少海家よりて

新草

二葉をりたみくちをく咲花も面顔こもら種迎のあは葉  
春晴 秋真堂よりて

花鳥れ喜く、新むらちを中を志と成阿もく此春の晴  
梅薰枕 武者少海家よりて



ふあれは祢是さすいふくちんちりし風の白く梅の香  
年月 海階堂

仲は海客の舟も舟の足もつれし朝日乃影をうきよ

時雨

定祿寺に次勅進五十賀

くまがねをくまの時雨のそらめし七秒ち日高く晴る山端

六月六日 氏者少海前宰相實陰の古今

御傳授をさせ給ひし時 恒右の湯社にまき

下

敷くせぬ松を倒しよ云れし力業ら此代や神もくれき

同日

玉津宮のあそび

云の兼北光成らるる世すそくち末てそ玉は海階

同日

吹上溪のあそび

涼しきあつくありとも溪風の吹上りてそ松の下乃

同日

養浦のあそび

あふらうえも久紀と免し和花浦の波はちみよりそる

七月八日

氏者小浜家にて

庭雷

詠もちくばりしすまは白書をこころぬ庭のうひしこねれ

八月十五日

母屋之成亭のあそび

線竹の移き入るひてまきこのあつ月の今宵を程影ひるき

同日十六夜

大井川のあそび

大井川のあそびをそ文と秋の月影をく潮くの岩浪

庭花

あそび勅進中村任人にて

あそび吹奏の朝風をあつらうに吹すく朝の在れ下陰

曉時雨

山端よりそく月も晴くあり志がし志くそ曉乃雲

神皇月九日於秋真堂

初逢恋

の生糸の剛瀬を去るはとと青のえとくち初ぬる中川のあ

日十三日 杉飯前 氏若山海家あて

風もさくさくまはる道阿ぬ秋はききあたりるさくさく庭の萩原

十一月二日 玄野あて

ふきりばる秋もされうる萩の尾花よ秋うま程に淡風

十二月十三日 氏若山海家あて

旅行

ゆつまくと清りなくさむ友も阿く旅のち乃のうきも忘れん

正徳五乙未年

卅心禅師八十笑

老の波八十瀬と出えとく幾も法の流地と清ハ施せ

正徳五年卯月廿四日

毫宕山法楽和歌二十首

山宿

伏見宮

邦永親王

心宿をたのむ白ききえ保ともうさむや春の志ちしちるん

防城大納言

残雪

後清郷

久しとる葉葉も久しは春の程小枝のふき花もこれ白雪

三条西右中納言

草漸青

公福朝臣

長閑なる日成程とく程入る色もぬ枯生志くこの春はあ葉

尾早宰お

春月迷

公長郷

おる海東と春に名くうたうひも阿りしう程あめま天の月



時雨

室季朝臣

高松侍従

一村をよきぬとて風誘ふ書抄詠たりましく時更に

清原信光中納

融氷

雅季朝臣

若祢小地りし木の葉をよきとて少るるをよき山の融つせ

室村雪

如雲 及改似雲

鳥の音も雪をりたぐにふりれてふかしく成記里北の北

菊亭三任中納

忠侍恋

公詮卿

うくとあふとそに志くれ契りて文をいひ流流りて

鳥丸右中納

恨身恋

光榮朝臣

今をあふらめもかゝて阿まのうらふ小位虫の名をよそ恨むる

阿禮三任

田家

公緒朝臣

夕暮八音吹くころ秋風の音も身に志重小田北より居

中陸大納言

社頭松

通躬卿

三木といふ多岐神のまの垣や西てら久しと云はれよは成

石大善院控大僧都惠通勅進

正徳五年洋生の以てしし世ふみあはく

こゝし世や風志つるねる明木の尾上北を小娘も月影

卯月十七日の曉

玉津寄りのりし海

玉つし海入江涼し月影を波よとせらふか和らけく風

江上朔雪

岩橋寺宗勅を

と新より入江の浪も君此を也朔日くまなく玉つし由山  
卯月廿三日  
於氏者山路家当座

十月

象えんく風打そく新行ふ銀りも宗の月地涼さ  
又月三日  
日当座

池少

兼もよつとさきく風小礼まきも少持むさくを新の池水  
六月六日  
於秋真堂当座

早苗多

少くも秋の由れ心とや星とあまくに早苗とさ  
十二日  
於氏者山路家当座

野月

梅もまき形成ちんがくも百多小一夜宿うか新月歌  
廿二日  
於中村任人早苗当座

水風晚涼

かつきまやも白波も松陰しゆく波を風め涼さ  
星夕言志  
氏者山路家当座

猿

夕暮も身いさあにまそられて猿の宿とさうくもさくめ  
氏者山路家当座

猿宿

うのくも此本陰を宿とさうくもさくめ  
八月十五日  
日雨

更とすそくけまにくくもさくめ  
九月八日  
日家より清出題九日の詠

既業記

春あけのゆるりともうさそそ長月の折よといぬるをうさの白菊

それともと麓の梢に白雲にのり花のおもりのけとら

冬山曉

来ふう紀ふに花をたもあめりの月にさえぬる小初瀬の心

海路

舟は東のこゆりやのるま帆くは風成りすうと浦み

え周丈ころりくしゆ中ころりく成りくして

そく来の目影すちのけに消れをころりは程成りくた

萩

風流くあふさけつゝ萩のたれも甘ぬ庭もくらふさむ

唐

朝まきも誰の枕の名跡として居むう裡のあきくもらん

十一月十日訪友之成事あて書文あすて琵琶

とききて宿しきも又の阿多初雪れぬりをれハ

その猪北川とめ十八流ともく今物うつゝき高城

日正二日

氏若山御家とて尚在

寄草子意

末うもそとちゆりくちひこれ系落家とて代くあめのみむ契うハ

日月 述懐

いほくよの宿とささめむ風の上をのゆきくはねひらるる

十月七日

氏若山御家とて尚在

秋田

石に物くちほく秋もをそくころ極し山田の夜そとら

十二月六日

於秋典堂山田在

野分歌

風よたにさやたし 種彦の小菰系もあつてさうさう  
日月 益明和尚の許へ可重帯此おふめては  
とて

はねにせら花よ紅糸よ色もあつてさう  
日月 述懐

家よたれ忘れもそある世の中此人も  
正徳六丙申年

歳旦

正未乃山

一本乃松風ゆくまやううさう波あむ志乃乃  
正月廿六日

渡月

於武者少海家

雪霧のり糸もあつて波の上ふゆれ  
渡り月のまき

立春風

岩橋寺宗純を

毎代もむすあめのみま風よぬきも  
とれぬを釣の長宗

日影さげ落葉うう六つり免て恒孫  
正月五年十二月廿八日  
台後傍都

の許より  
そあつて糸もあつてはぬきも  
つれて煙や絶ら

返

朝野あえハ絶孫とめつり朝の書  
速懐

梅葉風

お氏若山路家

こもまねたもれ糸をさう  
梅う香れぬもさう  
ついで風のめやう

叢書御在事紀二十首の内

巻五 春 賞

厚れら成行むり殺ぐれ竹の一ノ二ノ此春のくくつと  
正徳六年二月廿八日 蟻通明神ノまゝて流り  
神ノまゝありしをいふ今もあはれ森の奥の本より  
三月廿日 友代乃坂より浦初為ばいなりと

波の上のうきとをいふそぬ面影のえりめ小舟を浦の初海

日 玉津沼神社ノまゝて流りて

月もあはれにあらぬ玉津沼あての馬を此入江

卯月三日 玉津の流へり初は春をいふ

をいふ初もさけり花うと友をいふ此春の根は初は白雪

待郭公

一勢よりあてといひ人友の流も待程あていふ初は白雪

五月五日

お代者小治家当座

端午

打ちを此草也や免の春あてて白ひ涼し初はあき風

首夏風

夏あていひくくくをいふ初はあき風のやうを

圓時鳥

立海り又もかこく一勢よりゆくあをぬ夜の内あてて

惠撫葉

初はあき草也あてて初は月影あてて白ひあてて

山照射

後にはあてていふ初はあき山の内あてて初は麻を初は

六月六日

お代者小治家当座

寄弓馬



あつさりやうしぬしつしそそたれやちんもうしとふんは

日十日日 日永

歳号

ふれきもあふとまふす十八いはるう年のうれぬをいふ

玉津名の法社を納

梅意社 法寺勅を

さそひぬくうつと袂し去風の吹ぬもむまも白梅う

海巾小あきうるをこんあ

海ぬの離ふ志し抄うても夕まきぬ相点のしれ

七夕

天川瀬ぬあふに神代より契りわさぬ星合乃を

竹生海しきまうつる乃ふこま川といふあふて

しりきつぬ能のうしびあうりれ人に名をこひ

侍りしにゆふまやの能とたふくをれを

坂ちうし雲はようをきり海後より誰中よとの能は白波

巖海八京の内

有浦客社

きよ来日能よもころにけ海しあうぬらや有の海舟

寄湊恋 氏者少海家留

ちりきてもこのひりき海士の捨小み社の湊し所むやうきん

夜麻 日取

春のちの月ハしちこれ陰し書はよてや麻の鳴らん

至陽

七月のきののうきし折菊もさけうまおしふあのおひま

晴明御社法樂十首の内

をそ草子風

竹下の秋の夕花風も柔涼くさやく庭の萩原  
経春雨 飯興堂よりて尚在

十一月十一日 於氏若山跡家尚在

寄枕忘

打もくを存とうるせある人も人にいひてはあやの小枕  
享保之年九月廿八日 貴社の湯社ましまして  
ありしも ね系此ちうきをうるとんて  
け秋のさやうやいほく山のきうのりちけうきそ  
曰古日くく梅山一り  
く海心ちそあめのお系に秋と書け道やまとな  
非毎月一日りふあ  
校うんーお系も今古ちのこまのむけし綿をそ

鞍馬山月性院の僧於證寂障をり

わまをれを花咲以もきふふふみちふあきた  
きふあけくまーいー返ー

忘れかたの葉も起るて花咲甚と繋るての葉  
三日初雪の阿一由

心われやのころ折る飯の色はほりらもうはれ今初め初者  
高松少お重季朝臣をり

初しを折色ほくはう初者山雲いふふふれりみち系  
返ー

鶴舟集

大井川うらふれあをそくそり山本のわらわら火の秋  
泉忘夏

夏名ハ岩とらぬ此等とて思ふ日もあつぬ心の本より

晩夏月

元ハとも秋とらぬわと水毎月の月と所と志むる所は

風早故中納言云涉遠志追善公長卿より勅を

雪朝吟法

障ハ花はりらハ玉の極木うと見えのれ庭のまきの白雪

享保二丁酉年

水郷去曙

又ハ今難波のまも梅うふむうけうきてまあ重曙

三月五日、氏者小浜家、庭の梅さうりぬらふ

實陰ハ詠せられ

をハ多々花とばうとら家梅我老くくの所とも忘れて

二重季朝臣

一志中の松を千年と趣うへう花に託さふま乃本の本

こりあんにゆり

云の葉れをも笑をよとわらふま世うぬまのまれ本

夕鶯

於氏者小浜家當在

永日も色をやあつぬ梅柳本はこひつた當のこゝろ

前花をうらな

去るひるを我心さ入風の上ふあうら定ぬ花の志く雪

又月十六日、風早宰相公長卿、涉母公此妻よ

入おもむくし、二海の中はうら

故長神のまぬまをいし、をるはむやかたははぬのた

返

いとく神ぬくまを故長ぬきさるたとの又月夜の心

はは神打さるり乃短冊、母、祖虫、公もたうてらうと

巷白くれば井北の川を竹乃小枝と結ひ付  
られ侍し

夏中郭公

竹はとも枕はあちやちの程の夏初よりさふ山車とさ

松納涼

吹まふ舟さうこあて河内河津涼記まら乃志く陰

後湖志 於秋興堂尚産

きぬの阿たの月ハ影きこて後くのる神めくつう

湖邊一鷹 以敵山後山後産室少産

入日さたうの沖北旁るるあふれてこし鷹の一羽

浦初娘

ききいさやちを所し志む結衣之秋風の神れく波

享保三戊戌年

雨中花

厭離唐りりく

打志めま下も神小うらるるあ志川にわらを北あめ本

郭公成夢

悲ひ者なきとほくしを時多夕と初きののそやとん

五月五日

氏者少路家めて

首白蒲

るう記初とむしとあやあめ枕中誰のんそん

夏衣

山花葉唐少て

又乃が河喜あし記と枕し涼しをさむら友の夜北夏

同和五月雨乃こ街

常らりもさうりく言れ高程所らさうひきり又存面北記

八月十五夜

晴く世のわくがし涼雲もうらるるあ月の志くま

享保三戊戌年八月十八日

日吉神社法樂和歌十五首 惠通勸進

山早春

春日蓮院宮  
尊祐親王

きのふ中を君ふむる一山端もいほしうまるといふ可長采さ

雨中花

冷泉三位  
為久卿

うろろく恨むるもきふは中つらら花に枝より待えり

活苗代

坊城弁  
後将朝臣

苗代もあせりとおけはやあせりもを乃人うろろ

郭公迷

四王院大僧都  
空胤

おろつれさめぬ後うと時名ゆつりもあつる夜中れ一と

夕網涼

徳波助ヶ田次官  
晴宣朝臣

くれぬうと木と衆乃蝶も髪やそそ紗らも陰に風也涼しき

野外廉

今出川中納言  
公詮卿

娘の裡に尾花のりしよのそひとるくやと廉に中納言も髪

名不月

風早前宰相  
公長卿

あふれも光を多し一秋よとむむ月のやま乃娘のおほけ

紅葉表

皇海前宰相  
國久卿

飯ふらうろろを一人もききハ中くこ紅葉の指表乃むろ

浦千鳥

十宗院大僧叔

惠通

風ももよほのさく波もあはれ 仲ふの鳥のなきさうらゝ

冷泉中納言

遠村雪

為経郷

心をきこふやとかなや 霞つくと老の未だ北山と乃一むら

凡早中納言

寄衣恋

實積朝臣

小夜衣うきもの恨み 今ハ思ひくしとそ友やたのしみ

高松少納言

寄枕恋

重季朝臣

枕ふきぬさうらの涙うかろくもつらき夏の名残

雫丸院舞

寄琴恋

光榮朝臣

春もあけもあけぬる琴のいともをさすまをうき思ひありとハ

山家詠

似雲

信や誰か秋の苦くしとそ北乃うきさうらゝのくれの

中流前大納言

社頭祝

通躬郷

うき波のこもらもいづくも志く北浦や日名の文指はりたむまで

九月九日山花菊菊一席し信し北浦の一花咲き

つらき

長月のきくとも志く思ひ里ふらわらきこの心とを

泉石佐理の浦

浦をく入日の光もさうらゝの光をそ波北をふれま

武者小跡實陰つばいこり此都めて布とくき  
乃移を夢人すれありいあし八州もなうつらに  
ちやあんとをそくいつちへおちてりいあめつら  
こりあをい云下りあめとおちせつ種れなきを  
いあめいあめあ月も初おハゆき出あそのい布とくき  
いあめいあめあ月も初おハゆき出あそのい布とくき  
いあめいあめあ月も初おハゆき出あそのい布とくき

早苗

飯興堂より

あきりも彩をぬきそそあ竹のさうし居者ハ是れきき  
あきりも彩をぬきそそあ竹のさうし居者ハ是れきき

日 埴夕顔  
日 汐路サ菰

秋菰の色ううつあふあちうて分るも行記性人此うい  
松不改色

春雨

さうてあめ今一雨のれめしたる成さういああああ  
享保三年八月武者小跡中お公野羽屋湯妻  
乃思ひいあありりああひいああああああああ  
ああああああああああああああああああああ

田家朝市

夕暮れあめこのう秋北田のいれえいああああああ  
ああああああああああああああああああああ

谷抄雪

ああああああああああああああああああああ

大井川乃石より世を武者少海申納云 實陰つ海縁  
花形のおつらうきやうきまきし 蒼ちくくちらまの幾士

おかしーあつ海

似雲

大井河ちうきしー花乃おりのけとあせくうんせくから白波  
心清の心しりく

心清くはあひ我受け敬めて名成たしあつぬ鳥の驚く

述懐

西の北北の海にきりてちう人けりあゆふ和の浦海

菴ちくく潮あした心鳥の雌雄あそふ成るく

あきれくはくひるれちあ心鳥もぬちまハ屋を海てや位

享保四年九月三日晴 友申しこし海はく

うねる心家あく武者少海申納云 實陰つ海

前々ゆりく名申の松をとるく

月夜し表し一日し此者の松

須磨浦しりあ

志不むる明名のせとに風阿れてうき縁をぬちは女浦海

あやうしうあし宿しく雷北海をらみ友とて

人ハもあくされ立ちあまて

海者のあゆりし乃をち約の初とあそふいとく物さ

日年十二月十七日大鴻氏の許し者してま

の阿しき者成りて

打ちむく籬の竹乃末とれて者の相をふむし海心

おかしー海邊の鳴りた

月よんて名にきえしおれをりかりう子そと此者此曙

日五年正月十三日 兼藤会由新心不勅院し者

して



月影をそよもつる夜新夜に梅の香うとふ海の水

水郷春望 当座

山の隅に月影ありて新夜新夜に梅の香うとふ海の水

山崎梅夕

山崎入日の名跡芳きめて程前ふくは山崎の夕

坂上氏水亭一雨

西もろく川ろく柳をこえてくくくくくくくくくくくくくく

初めくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あつて幾程もゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

友人の逢ふべきのいとわりとくくくくくくくくくくく

歎無名恋 秋真堂当座

うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

せし

二星契久 高松家当座

羽衣のちほる契久はつらとくくくくくくくくくくく

高松村煙 右向

岩をまきく入日の名跡芳きめて程前ふくは山崎の夕

早苗 秋真堂当座

極くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

草花

花鳥まきく秋の秋風と小菴も枝のふくくくくくく

ふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山冷有微雪 古氏者小路家当座

やあめを降る風のくくくくくくくくくくくくくくく

顕悔恋 十宗庵当座

世に心もあつて深海いふあつて心もあつて深海いふ

閑見月

高松がめて尚座

詠にもよすよお甘る夜の雪をりもむらりあつむる月をほり

雪中坐

右日

世をむらむ心平くあつむる雪と雪ふえくは白河雪

除夜雪

お高松家尚座

ゆりつりる雪の光は志る人あてやあつむる雪やあつむる

夜白句

右日

うをむらぬ神もはま形家さうゆと掛あし一森の志先

歳と雪のあつむる雪の光は志る人あてやあつむる雪やあつむる

社頭見月

お定称寺尚座

神値やまけしふ雪あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

夕雪

右日

屋よりく月小く雪あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

春野

春きぬぬれ春あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

享保六年二月七日氏者少納言云實陰々

六十年来賀あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

君とんむる春あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

閑遊花

於十宗院尚座

お板や花をりぬる雪の光は志る人あてやあつむる

山早春

於原唐尚座三首の内

春きぬぬれ春あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

雪中梅

日影さだらくは梅の香消く春あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

花為春友

元成賀

千世ふとも春あつむる雪の光は志る人あてやあつむる

寄掉忘 於高松家当座

うひせちる花もまた掉のこころにても別しとらりて神ねす

漸待花 於運祿寺当座

木のうらみ程もあはれぬ咲出むむも種かた心づく社り

嵐山乃花城をこも

ちりばむ花ちりりせ六山乃名の花城をこもくくもてすし

塩屋樓 於高松家当座

ちりばむ花を風のよろこふてなむもあはれし海北翁

卯月廿六日胡叡殿前和向よりふくもくき候とす

いとて消息せられしに人傳郭公とすふと成

今ハと我ももろせ人傳小初者ハきくぬふもくき候

卯月廿九日箕面藩城をこもく

ふのむ心又もきそえん藩はとらと子とといろ人又月五此は

友とせらる人の笛城ふくもく候と

笛乃者も松のありし吹とてむくもとらるふの流せ

海邊郭公 經波は位をさ井本成儀亭也当座

時高聲もせらるの波北よふと海りちけあつきのそ

わしとせらるるきたの啼もまは

かり枕經波乃昔の一夜小もきけハ竹をさるふとときたに

吾方中一層

はらときたるくつもはく層のむつさや吾方こま入初との一り

水籬城竹ノ海

心もあはれくつおれの紫の戸をめまこむふ山獨の月

納涼

花梅のこり朝をりぬ志をこらり縁をこらるあゝの涼さ

月前二席

吹波在し風清死月影小紅葉くをらふさきりし此發  
又月十五日宇治川の堂をよそむ

池前葉

さきおのひとうちの川端より免くりてもをらふやうき

池の面をちるお葉ににうりれてくれろ并に居居の面ち  
六月二日寂真なる師の初をりくうくせねひ  
こゆうきくめうくうふしうあち竹をよつう  
きやうり信りねし毎年はとせううしねひ  
きよき信りの信り志小世成免くして毎事しん  
後の形えんしもとて信りしころんまより  
兵行世成も免くしてねおねうう形えんとこれしうき  
年月を魚あつる中北は川渡りもやまの名しころんて

寄渡恋

うき中の海をそらるるあのか神の渡りもをせねうけて

武部々の追悼 十景院許へ

空蝶の世れらのねきびやにーめてさせれあなき夜あめ

初飯

忌路の席室よりして

かりそめとをさげうもしたに席志めてましりもきくぬ飯初風

旅宿櫓

あへとも誰神ぬまきーううそあめ弟此櫓小白ふくも花

国月七夕

いつの又年月うき祢人一とせふてうひくをせえ人のね衣

野蔭

お運祢も当座

とせえ入江の浪も白あは尾花くはくく三粒の浪風  
はくくえぬ夜の玉や花蔭あもしふあまら形へり夕あ

夕路更方

於為基旅者当座

と此つふ里の栞を考ふにめてゆく、さゆら遠の心端  
時多ゆもつとてさう、秋の波をいそふれ秋は雨の  
雪をかきさしゆく

海眼望

吹あふと程分の風も心幣と秋の海のこぼれゆく

後羽恋

笠場氏友お勅を

初冬恋

あひそめて又し末程のまればはきれゆく人もうらさる  
阿とさりゆくさうさう、日暮るるり来たのむんさうふ  
冬初ゆく今と身小なる程、おまふ、思ふも雲といひぬめと

紅葉深處

いとさう時多し、雨と霧と、さうて秋色さうれ、さうさう  
村志くれ深き、さうさう、秋の波をいそふれ、秋の波を  
来度う時雨と海と、秋の波をいそふれ、秋の波を  
後の又月古日秋、松井氏、さうさう、さうさう、さうさう  
さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
月と心と、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
去年の波をいそふれ、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
駕れ海やとれぬ、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
同古一日、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
明をむるさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
辛海、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう

唐痔やふ里の、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう  
同古七日、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう、さうさう

榴姫も神なりし人來りて時をてりくく宇治の川へ

八月五日、為去、吾妻へつゆりきり時

福多も月ハ初とくち娘といひくくんをてり、人乃はくん  
別をそとくちくちん武彦、桂の月ハ初とをひりてを

返

為去

んをそとくちくちん武彦、桂の月ハ初とをひりてを

留別

曰

長しれくちくちんをてりくちくちんをてりくちくちんを  
初は行われぬも弟乃初もそとくちくちんをてりくちくちんを

返

おきりつふと又ありいきをたぬく初も初も初も初も

初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も

初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も

初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も初も

思、本肥、後守、保助、所ま、りり、と、悼、ま、あ

八月十二、奉、月、の、お、居、は、ん、ん、ん、

山、駕、は、あ、く、も、月、の、お、居、は、ん、ん、ん、

日十三夜

吹風のききよきぬく海雲ハ空を消る月の光り  
日十日夜石清あり八幡宮へまゐるとして伏見  
より舟へのりゆりしに月より影を照らすを  
あまねの影のまをり舟の影をくくすり海の流れ

日十五夜 秋 雄健 心 じりり

雨もよに鳴つるまとの星をれく名も此月の光をいひ

日十六夜 福 荷 心 じりり

いろり心も来月の出しよりおのころぬらぬら

日十七夜 喜 ね 心 の月 げんげん

うぶ心もよきさして喜ね心松よ風よ出る月影

日十八夜 うらむの啼 げんげん

おをぬき福くをよせて鳴鳥くヤケキなれ月の光をいひ

月前の夕月 お運称寺 尚 産

鳴廉よなれも心ひをよめ月の光をいひ

第 彦 月 右 日

まむんとまむれをそのあつとすそ月小松にむる

よれくもひらやまむれまの属チれお小花くる月影り

八月十日 定家 乃 沙 歌 徒 お運称寺

對月 懐 旧

月影をおちりしころの云れまよりおん

影きらけ古日の月も小倉心むりておの神の影を

物 田 の ち び 人 の 渡 ち ね 出 し 終 不

海よりついであそび人やうらりもをぬ瀬田の長

野 外 秋 お並河氏 尚 産

高れく神ふらりて交際世のね嘆秋と家つと

武藏野や秋咲ははむらさきの毎一帯のありともは  
残雪

白雲とくはあめのかめを名うた跡まき昔跡の家  
梅風

吹海くははるまやいほまきく梅咲はくははるまの春風  
春月

山裾を抄るうくを河をそく大空を流く月抄うとめる  
歎を

村をともすぬまきと昔より岸を吹やいとぬを抄る  
享保七年十一月於近称ち高田庄

夕陽映海

今そらと沖の小島も末遠に消く入り方影を抄く  
十二月十六日艾管高田庄

深山雪

咲花のわらうらうらく深山もをちめ里のれぬを抄く白雪  
日十七日信田新たり毒花を抄る

冬籠る枝く色を抄るくも昔もやん人梅の初を  
返

よわく一人の心も色を抄るく深山もをちめ里のれぬを抄く  
日廿二日 於金堂寺高田庄

家く歳暮  
見たりとまきと志をうり誰者も初はく深山もをちめ里のれぬを抄く

人々をかり影心むるを抄るく深山もをちめ里のれぬを抄く  
草席の底く竹環うらんといひをれと人乃許たり

根くくはるく



けりあふらねしきんはぬはなるるあつせし言のくれ竹  
うの魚

まねるるる染もんそけいあふかれーうひわらんぬを  
後者雪

あはあんとしあもく程々今青よりあひ純粋と積る白雪  
野外夕虫

松虫の勢子ほつふとひらち道もとくー種々の夕暮  
契意

契てもつるかなひの人のいさー波も末の中川心  
松雪

まそいそあつとひう程む程の松おきうそつりるあつ音  
初冬曉

ふ松乃まはれまの風もあきぬとあつとあつとあつとあつと

客々集

さしさうハなふあつとあつとあつとあつとあつとあつと

遠村雪

初はあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

渡音

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

浦千鳥

世はあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

表西敷

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつと

鐘の音もさあや柔夜にみゆる神川のほとり埋火の本

あゝ速懐

後の世の事をとつふを多かれ老うくれば身をも歎

深草里よりとく音乃あゝ

うす

ほそくしうくの床をうらむれて音の花咲深草

雪ふくはゆりき居を

の里

末形ゆ竹のうら落る秋よの音下折ちうくぬきも

ゆきつと

落るひて庭不也積る音竹乃うらうりなひを

枝のきり音

寄月恋

くさくさゆらても秋の面影うらう秋うけくぬ

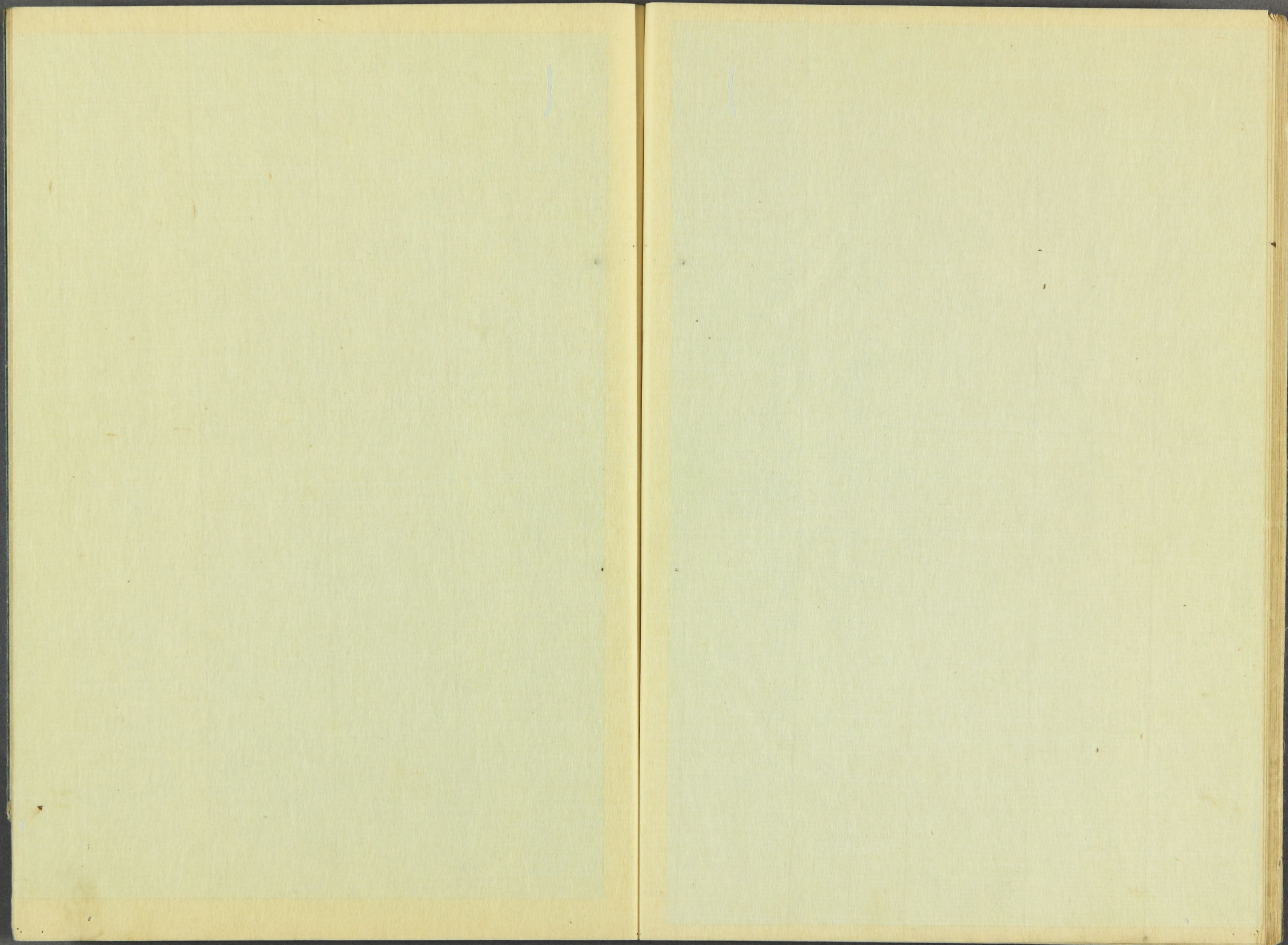
有明の月

秋懐舊

みゆい魚沼志のふらゆらにうらうらみ

みゆい久保埋火乃本

灯



三十一なるき巻第二

三十日景

享保六年九月九日

似雲

大神宮小まきうてんとしあふ居城立知かとも

立久し於袖りもころは娘衣おりふわいねかまのあひし

返

巖阿

娘衣あちよりあそころせねあふ咲菊小のふか色あ

小科りり

似雲

玉ゆりたうしうさそれ初いしうれはさるふ小科のそと

同日未の時をりまに大津地長安寺小芸志

ゆきゆぬわしと湖上の志くしけれは

三上ふらち福もりくしう徳の池を時あふはるまほの海

日秋ふ小宿しふその娘もあふ月えし

かどおりのいふ

と頼月を五年一ーの面影りりふてくるるの秋  
十日の秋 泉根心 前水 年一りり

泉根心 枕のト 老の鳥の 孫ふととの 叶と 枕はととと 夢く

十一日

来一 本乃ちふかれまじく 泣床ふれく 叶の ぬりぬり  
西乃 上人 泣床ふれまじく 葉ふとよまじく たま一  
寢ふとよまじく 泣い出く

ぬりすそぬりりりり 泣床ふれまじく 葉ふとよまじく 泣床ふれ  
光一まじく 泣い出く 飯の下ふまじく や日暮くまじく  
まじく

泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく

又乃 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく

十日 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく

泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく

泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく

十六日 二見 泉浦り 寂一 夢

泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく  
泣床ふれまじく 泣床ふれまじく 泣床ふれまじく

此等世家付例とて  
是れ也

日次外宮乃御祭事と常ふくはく勢給ひて、猶素  
去るを女く孝なしく、女たりしの神おおあつはり  
て、のく、その祀者、く祀こあがらり、まて、さたふ  
同ちりく、おうすれ、させ給ふ、御事、なむ、さく、し、  
いふ、さく、さく、ちり、ま

法乃道とおり、たか、一、長月素、こ、い、御、た、無、御、留、の、神、植  
ふ、く、森、乃、木、の、石、小、敷、え、へ、あ、ん、ん、ん、ん、先、於、月、く、乃、宮  
畧、外、一、神、業、と、の、ま、さ、と、む、月、の、た、ま、か、系、を、あ、つ、て、  
十七日、内、宮、小、訪、つ、か、さ、と、五十、鈴、川、の、あ、つ、と、を、て  
て、

又、鈴、川、法、氏、流、氏、を、あ、つ、と、ま、さ、つ、無、神、乃、ん、を、あ、つ、一、  
世、日、こ、乃、河、上、城、あ、つ、と、く、友、と、は、ら、人、を、と、り  
あ、つ、と、さ、さ、あ、い、て、判、の、か、ま、し、に、あ、つ、乃、ま、り、

ま、や、く、代、の、所、系、り、て、こ、乃、時、を、う、り、ふ、さ、給、り、り、  
取、の、海、事、禮、し、

海、取、と、こ、ら、い、い、こ、と、こ、む  
あ、ま、さ、ら、す、神、乃、ま、し、に、孝、者、を、侍、の、者、  
は、た、た、板、也、い、ま、と、つ、初、を、は、た、た、母、の、ち、

旅、衣、志、は、れ、小、多、り、あ、つ、板、も、は、た、た、り、の、り、は、あ、つ、取、の、名、給、り  
い、そ、へ、素、宮、素、て

海、取、く、波、も、た、た、め、文、城、い、と、と、誰、く、名、は、事、を、免、免、  
日、次、又、内、宮、の、お、は、ん、ま、は、り、ふ、ま、い、り、と、り、り、  
に、月、く、は、り、く、さ、く、あ、れ、の、海、取、も、今、存、在、を、  
禮、む、と、神、を、さ、く、さ、く、い、と、に、て、れ、り、あ、つ、り、と  
て、友、り、ら、人、く、深、く、感、を、さ、く、ふ、り、母、乃、あ、つ、  
り、さ、く、さ、く、御、取、乃、光、あ、つ、り、く、お、こ、な、ま、り、

阿ま雲を拂はくしてはむ月めくはは川に非風をぬく  
とにほほひ秋文てふ田不海宿と

十八日の夜やこのころのころでしるべし  
爰に感得とやかきあひははすきおとろし  
くはあうくくも怒うらむ記をまきり洞苔の  
夜はうらほせりき先しし海をこし乃  
時をくくりにて又又のころしらうく爰中の  
沸さぬあうくふりしれをいふ先乃  
かかぬうらむに推云あひ川すをも人ふうくし  
しうれはく爰のこはうらむかりうきしはさし  
きてくくく人あうんし急うれくく  
人もうくくもいん我も世を乃事いははく爰  
あうらや

古日澤小久りゆりしに例乃あかし一年以  
て先を並し一益石ありにれ小松をうく一  
席を考して詠しあを却く貝石をうれ  
りきうらふとこくくくくくくくくくく  
いしとゆきつて辞をいふとくくくく  
りしはくえしとく記をうらむと乃と禁  
うらふ

け壽石の安ん履ををえく常ふあうら  
おび中ふ一と代くくく水乃いきほひわり  
く何あむ筑波根と名はくくくくくく  
こさくくくくくくくくくくくく  
云の系も及くくくくくくくくく  
捨へ

筑波根をえにふりてさる地川喜三燈きお糸乃乃乃末  
古三日は砂紙知くわづまもふもむくんと  
とくふ風いとちけいそてすく可ふんせじ  
ほぐりく邪客くくふ立ゆか少と

いさこしとさ道ふもおふうやんやりあかぬんやとて  
古六日圓乃人ともとりいて紅葉ころりゆふ  
こはらぬ少く

里乃子のゆきふをえれは本巻本小落葉うれに推初紙  
青とてふふありゆゆ麻川山乃本此葉のつる海乃  
日々書ふ山ゆふ麻乃鳴るまれば

外心あらふ本のうろくく日やつまをやしや麻の知  
古九日雨ぬれ  
海東ち成ちうへく山姫堂飯乃とこれの神をえはん

神世月一日

夜たふさ子むまといくかき霧霧の葉乃松ふ冬は本あり  
二日或人みさそとと程とく笑の星たり六七所  
りやゆらん水くうくととふあお葉ををさふ  
ゆふがゆくとこれが河あをせれはけて離つせ  
乃やふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
てがはむととととととととととととととととととと  
うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
いとととととととととととととととととととととと  
毎々にやふととととととととととととととととととと  
はしととととととととととととととととととととと

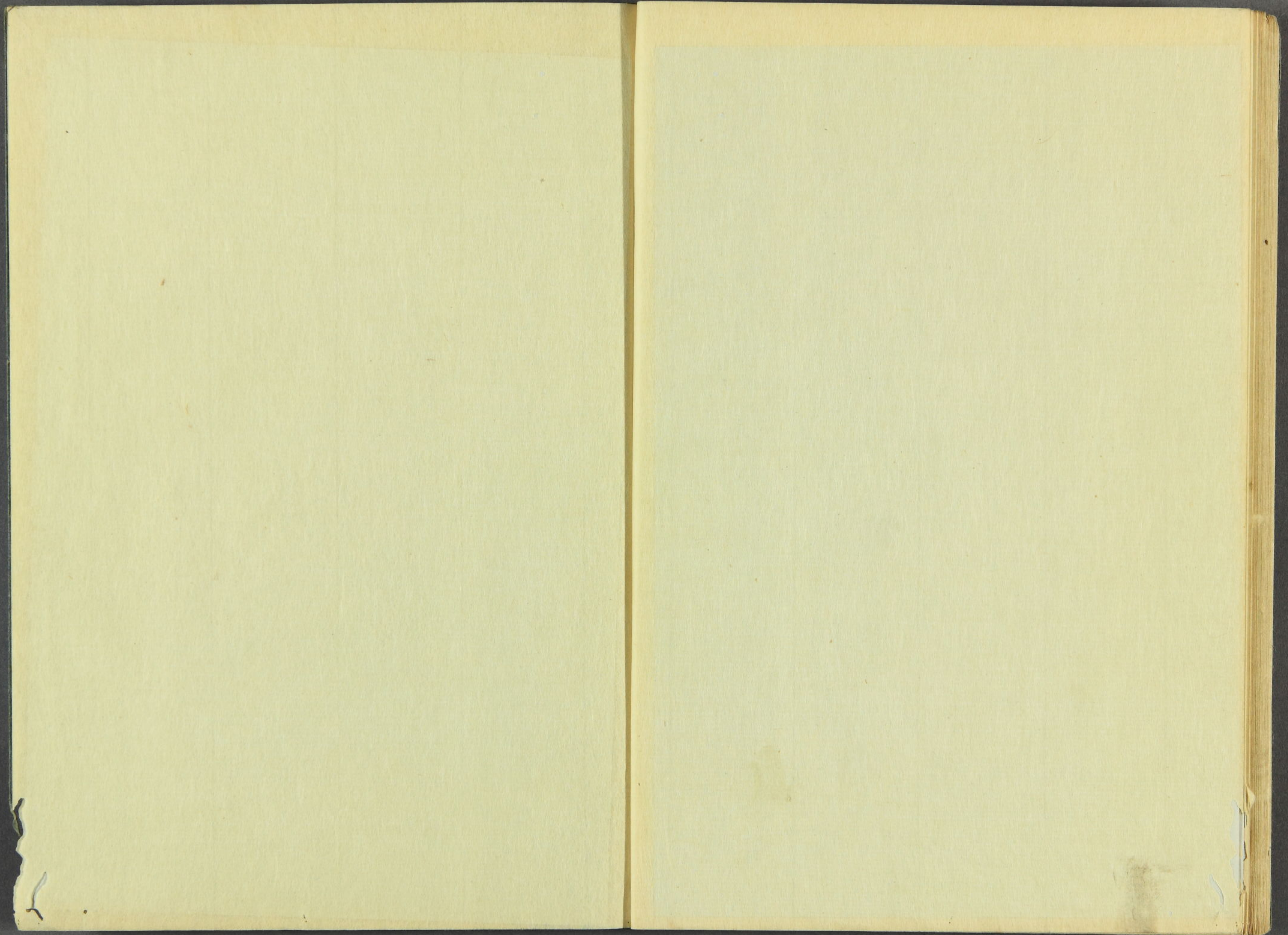


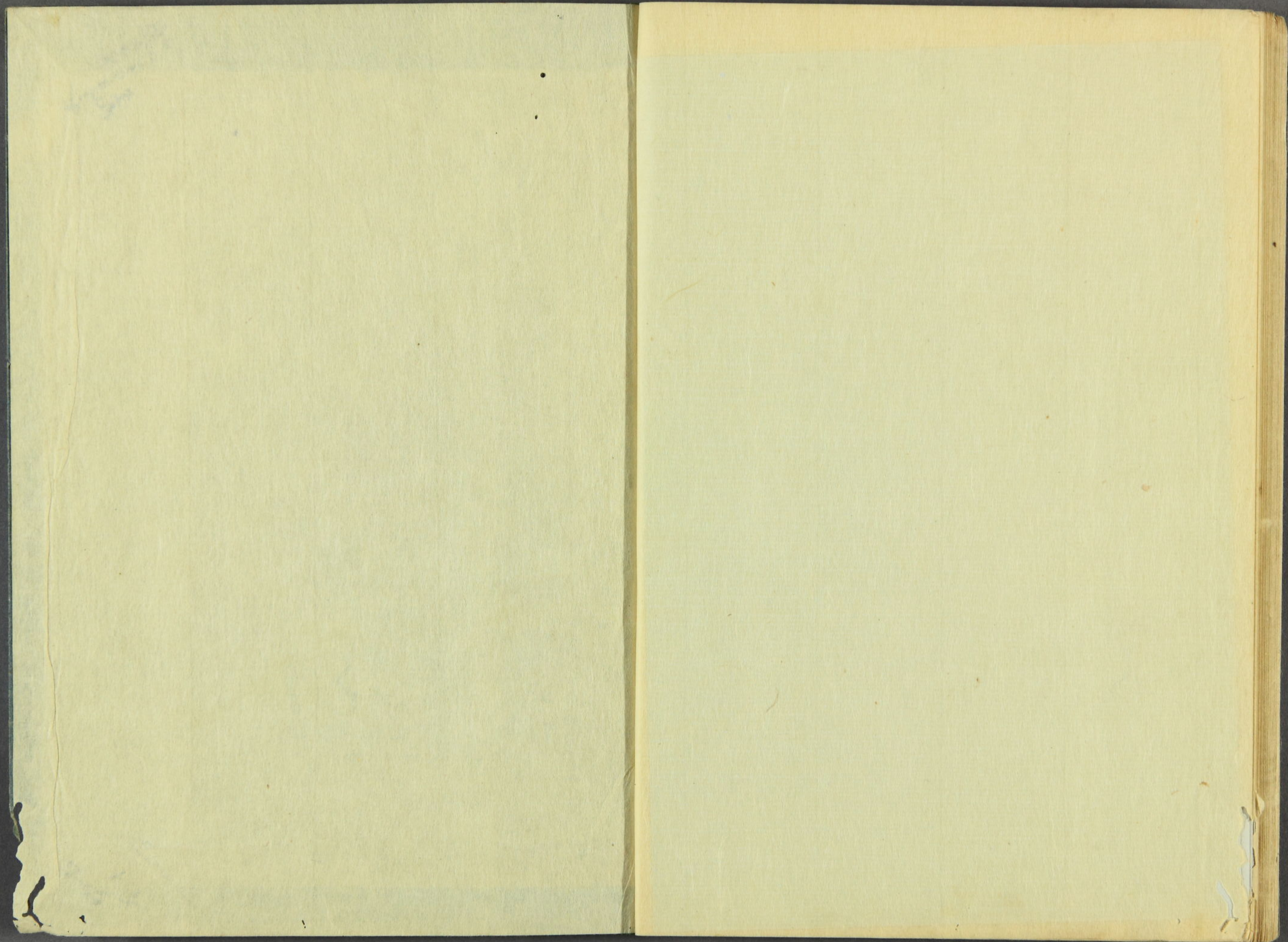




て毎りむもこをばはこし一はきこ及し玉の  
記かりくり返しつるよふこのうんさ極  
おのころもと哀れうん  
おんたの法をそとふその名を玉のまはれ  
八日まふ唐よつりくこれたあしのみまふ  
これおんれくまきこつりおんまふこ  
をねる  
まふあるしをまふやま枯のほりたますねく  
おんたありくつりまふまはれの日おんた  
そんたありぬくつりまふまはれの日おんた  
うまとしりふりこつりまふまはれの日おんた  
し云乃葉今さうくおんたまふこつり  
あま

おんたはめてるこつりまふ  
おんたありちりまふ葉  
あまこつりまふ





Handwritten text in Arabic script, likely a library or collection stamp, located on a small triangular piece of paper attached to the top left corner of the left page.

